

「ニヤフルル(Nyahururu)という所へ旅行に出掛け
「ニヤフルル(Nyahururu)という所へ旅行に出掛ける。
ナイロビからバスで2時間から3時間。中央ケニアの一
番肥沃な大地、いい気候の場所。当然そんな土地はイギ
リス人入植者が見逃すわけも無
く、今でも入植者の3, 4世が多
く住む地域の一つだ。

ここに入る前にニエリという
地域で一番大きな町を通る。こ
こもイギリス人が現在も多く暮
らしており、ちょっとしたヨー
ロッパのような町並みで、白い
ビクトリア調の建物に、ケニア
のピンクのブーケンビアの花
が生き茂っているのをみている
と、どこにいるのか分からなく
なる。

目抜き通りにはいろいろなお
店が立ち並び、ナイロビの町と
は違って少しゆっくりとした時
間が流れている。カフェがあり、古本屋があり、アンテ
ィークショップがあったりして、イギリスの文化が感じ
られる場所でもある。ケニアの人にしてみたら感じたく
はないのかもしれないが、ケニアの植民地であったこと
の歴史の産物のような気がして、私は歴史を感じながら
のんびりと買い物を楽しんだ。ふっと入った古本屋の店
主もイギリス人だった。

彼はちょうどティータイムを楽しんでいたらしく、私
も紅茶をご馳走になった。ケニアでは、ミルクティーが
一般的。しかし、彼は、新鮮なケニアの茶葉を使ってス
トレートティーを楽しんでいた。

イギリスで売られている紅茶は、イギリスの紅茶会
社がケニアで生産し、輸出しているもの。それを本国で美
しくパッケージし、他の茶葉を混ぜたり、香りをつけたり
して付加価値をつけて本国や海外に輸出している。ケ
ニアの茶葉は、工場でランク付される。1番と2番の高
品質のものは海外へ。3,4番は混ぜる目的で買う国々
へ。5,6番は「ダスト」と呼ばれ、茶葉ではなくてほとん
ど粉に近い状態のものは、ケニア国内へ。一番良いもの
は、海外へ。一番悪いものは国内へ。売り値段の差とはい
え、イギリスは今でもケニアの人々の暮らしに影響し
ているのである。



そんなニエリという町を後にして、「ニヤフルル」に
向かう。ここは、世界で活躍するマラソン選手の出身地
として有名な町だ。バスを降りたとたん、坂道の急さと
多さに驚くと共に「空気の薄さ」に気がついた。少し歩くと日本人の私としては息が上がって、おしゃべりを続けることが少ししんどい。標高を調べてみると、2360メートル。ケニアの人も観光にくるニヤフルル。穏やかに降り注ぐ太陽とさわやかな風が気持ちいい。

私は道を歩きながら、どうしてイギリス人入植者はここに住みたかったのだろうと考えていた。水が他地域に比べ豊富。農作物の収穫も豊かである。私はイギリスのどんよりした空を、長い冬を思い浮かべていた。それに比べればこの溢れるばかりの太陽の光は、宝物の様に見えたのだろう。本当にキラキラと眩しい太陽の光で溢れている。

坂道に疲れを感じていると、前方から歩いてきたロバに荷台をつけた老人にすれ違う。

—「私を運んでもらうと幾らですか？」と私。

—「君は何キロあるの？」と老人は笑う。

—「それは秘密だけど」というと。

—「大丈夫。お金は君の持っている中から適当に払ってくれればいいよ。どうぞ」

と言ってくれた。

ロバの荷台に揺られながら、どんどん坂を上がっていくとそこには、トムソン滝(Thomson Fall)という名の滝があった。この滝を見下ろすような高台に着いた私は、「滝の下まで行けるよ」という地元の人の言葉に従って崖を下り始める。観光地化されている場所ではあるものの、トレッキングの格好が必要と感じるほどの崖である。

ごつごつした岩が上がったり下ったり。現地のアフリカ人はすいすいと崖を降りていく。遠くに音だけ聞こえる滝の水しぶきが顔に当たる。30分ほど一心不乱に、身の危険を感じつつ歩く。しかし、本当の身の危険は滝に着いたときにあった。

「カバ」がいたのだ。学校の教室の半分くらいの大きさのカバが滝つぼから出てきたのだ。



カバといえば、草食にも関わらず、身を守るため人間を殺すことでケニアの人は恐れている。滝の水しぶきで顔がびしょびしょになる。滝にはいくつもの虹がかかり、幻想的な景色の中、カバが1頭、2頭、3頭と確認できた。野生のカバは生命力にあふれ、水陸両用な彼らは、す

いすいと水の中を移動したと思いきや今自分がいる崖の所まで上がって来れるのだ。静かに、帰り道を急ぐ。自分の心臓の音が聞こえてきた。直感的に「殺されるかもしれない」と感じた。振り返らずに来た道を夢中で戻った。途中、カバの「うおー」という声を聞いたが、振り返らずに進んだ。ほうほうの体で上にたどり着き安全を確認した時は汗がびしょりだった。

滝の周りには何軒かおみやげもの屋さんがあり、カバの木彫りやキーホルダーなどいろいろ売っていたけど、思い出したくない思い出になったので買うのはやめた。

少し歩いて、ホテルのティールームに入った。オーナーはイギリス人。美しい建物と花の数々。おいしい紅茶に魅了される。イギリス式アフタヌーンティーも用意できるとのこと。

いろいろ巡っているうちに、坂が多いこともあるが、とても疲れているのを感じた。空気が薄いせいだろうか？しかしすれ違う下校途中の子供たちは走っている。はだしの子ども居る。しかも全力疾走に近いスピードで駆けていく。追いつけない私は、後ろから声を掛けた。

「何で走ってるの？」私は聞いた。

「家のお手伝いを早くしないと、日が沈むので勉強(宿題)の時間がなくなるから」

ケニアでは、電気がない家が多いので、日が沈んでしまうと暗くて勉強が出来なくなる。しかもどの子供も下の子の世話や家の仕事を手伝っていて学校から帰ると仕事が盛りだくさんなのだ。お昼休みに昼食に帰る子ども多数いるらしい。一日2往復。ケニアの小学校は、6歳から始まり8年生までであるので、8年間はこうして登下校の度に走っているのだ。しかも、1,2キロの子もい

れば、なんと8,9キロもの道を走って学校に来る子供もいるとのこと。

「ケニアーなぜ彼らは早いのか？」(忠鉢信一著/2008年/文芸春秋社)という本がある。人はケニアの陸上選手は遺伝子が違うというけれど、その遺伝子とは何なのかを調べた本である。結果、そんな遺伝子は今のところ見つかっていない。だとすれば、子供の頃から毎日坂道を、駆け足で走り続けることで培われた才能、環境こそ彼らを世界一の陸上選手にしているといえるのではないかと思えてくる。



がけを登る人